

心理学と社会問題

—Psychologists for Social Action (PSA)
について—

お茶の水女子大学 吉田 章宏

今年も例年のように、米国心理学会 (APA) の大会が 8 月 31 日から 9 月 4 日まで催される。しかし、この大会には例年とはちがって、二つの異変が見られる。すなわち、第 1 には、会場がもともとの予定地であった Chicago から Washington D. C. に移されていること。第 2 には、大会のテーマが定められ、それが「心理学と社会問題」(“Psychology and the Problems of Society”) となったということである。いやもう一つつけ加えてもよいかも知れない。それは、来期の APA 学会長に New York 市立大学の Kenneth B. Clark が選ばれたことである。彼は APA の 77 年の歴史で黒人として最初の会長となるわけである。さて、以上のような出来事は、日本では、特に異変としては注目をひかないかも知れない。しかし、これらの出来事は明らかに異変である。しかも、これらの異変をひきおこすのに陰の力となったグループがあるのである。ここでは、そのいきさつと、このグループの主張と活動について紹介することにしてみたい。

このグループの名称は「社会活動への心理学者」(Psychologists for Social Action : PSA) という。このグループの歴史は極めて浅い。その前史は、New York と California における心理学者たちの独立の二つのグループに始まるのであるが、正式には、昨 1968 年の San Francisco の APA 大会で発足したにすぎない。San Francisco での、夕食を忘れて夜遅くまで熱心にまた活発に行なわれた討論からこのグループの母体は形成されたのである。その短い歴史を詳しく追うのはここでは止めにして、PSA の目的、機能及び構造を見ることにしよう。それには今夏投票によって採択した内規の前文と第一条を引用するのがよいだろう。

前文には次のように書かれている。「われわれは心理学者としての社会的責任を深く感じるものである。この責任は、議論と研究を越えて、われわれに行動することを要請している。われわれは現代における緊急の社会的かつ人間的諸問題に対してわれわれの知識と経験を適用する方法を求め、これらの問題には、人種差別、軍国主義、および貧困の問題が含まれる。人間として、われわれは、人間の潜在力の実現をさまたげる暴力と非人間化の諸力に直面している。専門家として、われわれは、社会にわれわれの影響を集中し、これらの諸問題の底にある原因を探り、さらに、これらの問題を解決する助けとなるために専念するものである。われわれの活動のあり方は、われわれが実現しようと望んでいる社会を反映しなければならない。われわれは、個人と集団の思想の自由と自決の権利を支持する。地域グループの連合として、われわれは、地域の自律と国全体としてのまとまりとの双方の長所を共に結合することを求める。各グルー

プごとにそれ自身の活動の範囲は確立されるであろう。それらの努力は全国的レベルで協調させられるであろう。」また、第 1 条には、PSA という名称に関する規定と以下の目的に関する規定がある。すなわち、「PSA の目的は、心理学者を組織して、専門的職業社会を通して、その職場において、および地域社会において、人種差別、軍国主義、および貧困の絶滅のために、また人間の潜在力の実現をさまたげるその他の社会的人間的諸問題の解決のために活動する自律的な地域グループの連合を作ることである。」とある。

組織は、従って、全国組織である PSA だけでなく、各地域にたとえば Chicago PSA, New York PSA といった組織ができることになっている。会員は 1 種類で、本会員とか準会員といった区別を設けない。会員資格は、心理学的な性格をもつ仕事にたずさわる者という、比較的ルーズな規定に落ちついた。その他、委員会等についての規定があるが、それはここでは省略する。ただ一言注意しておく、このグループは各個人および各地域グループの自律性をたいへん強調しているということである。したがって、上位グループが下位グループあるいは個人がとるべき行動について指示を与えるという性格を持たない。各グループは単に連絡機関ないしはコミュニケーションの場であり、行動そのものについては各個人、各グループの自主的判断にもとづき、それぞれが適当だと考える場合に、適切な行動を開始し、参加し、実行していくということになっている。このようにして、組織が官僚化したり強直化したりするのを防ぐ配慮が前もって充分に払われているのである。この点は新しいタイプの組織哲学であるとして、雑誌 New Republic 1969 年 2 月号に触れられているところである。

さて、ではこのグループは現在どのような事柄を問題としているのであろうか。ここで、2 か月ごとに出されている PSA の News Letter の “Social Action” から、その問題としている点を拾ってみよう。

Social Action の第 1 巻第 1 号である 1968 年 10 月号には、PSA が APA の代議員大会に決議を提出することが報ぜられている。

そのうち一つが、1969 年の APA 大会を「心理学者と社会的責任」というテーマに集中させるべきことを APA に勧告するというものである。この問題に関連して、いくつかのアイデアが提出された。大会ではシンポジウムや研究会などによって参加者全体で討論する場を作らばどうか、たとえば暴力の心理学に関するシリーズをテレビで放送するなどして一般公衆の教育を目ざすべきだとか、あるいは、単に外部の社会問題だけでなく、心理学者自身の問題点を検討すべきであるとの意見も出されている。その例としては、心理学者の研究が無反省に採用しているもろもろの前提の検討とか、国防省から経済的援助を受けることの意味などである。もう一つの大きな問題は、人種差別の問題であって、APA は学会として人種差別を除く努力を可能な限り払うべきであると勧告である。具体策として提出されたアイデアには、たとえば、黒人学生や教官に援助を与えるべきこと、スラム街に関する研究を促進すべきこと、APA の

資金のかなりの部分を黒人会社、銀行に投資すべきこと、また、人種差別をしている会社、たとえば印刷会社など、との APA の契約を打ち切るべきこと、APA の Washington 事務局で黒人を可能な限り雇用しているかどうか監視すべきことなどである。

こうして、このとき、その後発展させられている活動の主なものアイデアとしてすでにでて来ているようである。

その後、これらの問題や組織の問題を整理して、PSA 入会の案内書が作成された。そこで PSA の当面の行動計画に含まれるものとして5項目が挙げられている。

その第1は、1969年の APA 大会を Chicago からどこか他の都市に移すことである。このことの意義は少し説明を要するかも知れない。1968年は米大統領選挙の年であった。共和党の候補は Nixon にほとんど決っていたが、民主党候補はだれに落ちつくか混とんとしていた。有力な候補は、Kennedy, R. 亡き後、いうまでもなく Humphrey と McCarthy の二人である。このいずれにするかを決める民主党大会が Chicago で開かれた。それまでの予備選挙で運動してきた運動員たちは続 Chicago に集まって来た。なかでも、資金なしで、ドンキホーテと呼ばれながら運動を始めた McCarthy を熱狂的に支持する若者達は、ホットドッグをかじりかじり、寝袋を背負って、ヒッチハイクをしながら全国から自弁で馳せ参じたのである。こういう形態の自発的な若者達の McCarthy 運動は、全く新しい形の政治運動として、その後もくり返し論ぜられたものであった。さて、Humphrey を支持する Chicago 市長は、この若者達に対して大量の州兵と警官を動員して規制に当らせた。そして、衝突が起った。この衝突の様子はテレビを通じて全国に詳しく報道された。逃げまどう学生、歩行者に警棒で襲いかかる警官などなど。多数の負傷が出た。カメラマンがカメラを警官に奪われるなど。そんな事件が何回かつづいた。民主党大会そのものも大混乱のうちにボス達を握っていた Humphrey が候補として選ばれることで幕を閉じた。しかし、明らかに Chicago 市長の指示によるこの McCarthy 派に対する弾圧事件は、とくに知識層に強い反発を招いた。そして、San Francisco の APA 大会で PSA グループの活動をひき起したのである。PSA の二人の会長のうちの一人である Jack Sawyer は次のような趣旨のことを述べている。

すなわち、「APA の心理学者の倫理綱領の前文には『心理学者は人間個個人の尊厳と価値を信ずる』とある。われわれが、自分の目を見た Chicago の暴力はこの個人としての尊厳に対する明らかな攻撃である。もしわれわれがこのままだまって、1969年の APA 大会を Chicago で開きこれに参加するならば、それは、われわれがこの Chicago 市警察による弾圧を容認することを意味しよう。Chicago に行かぬということは、この暴力行為に対するわれわれの強い抗義を示すシンボリック的行為となるであろう。」こうして、1969年の APA 大会を Chicago 以外で開くべしとする請願が1500名にのぼる心理学者によって署名されたのであった。1か月後、代議員大会では79対22で大会開催地変更の決議が採択された。そして、Washington にきまったのである。多様な

見解をもつ人々の集まりであるにちがいない APA で、このように明確な意志表明がなされたことは驚くべきことである。しかも、事務上の非常な面倒をあえて押し、しかも、このようないわば穏やかでない決定を下したことは、APAとしては大異変の一つであったにちがいないというわけである。この異変を起したのが PSA なのである。

さて、PSA の第2の行動目標は、1969年 APA 大会のテーマを「心理学と社会的責任」とすることを提案することであった。これは結局、「心理学と社会問題」と変更して今年の大会のテーマとして採択されることになったのである。しかも、このテーマは単に名目的なものではなく、APA のシンポジウムに反映されることになった。シンポジウムは大会中毎朝10時から12時までで、この間他のプログラムは何もない。つまり、大会参加者の誰でもが参加できるように企画されているわけである。トピックは、C. Bereiter や P. Suppes らの「幼児期学習と埋め合わせ教育」、「大学キャンパスにおける学生紛争の根底にある要因」Kenneth B. Clark らによる「都市問題への革新的接近」、G. A. Miller, D. Hebb, C. Osgood らによる「急速に発展しつつある社会における科学者」、それに「心理学者と連邦立法」などである。このほかに、PSA による研究集会でトピックスとなっているものには、「社会行動の倫理」、「科学者としての、また、被験者としての女性」、「大学院教育に関するシンポジウム」などが含まれている。とくに一番終りのトピックについては、News Letter の中でも、心理学とは何か、大学院における心理学を社会的に意義あるものにするためにはどうすべきか、などといった形で論じられてきている。いずれにせよ、こうして、PSA が昨年計画した以上2点は、そっくりそのまま実現される運びとなったわけである。Social Action 1969年7月号には、「月並みでない大会」(Unconventional Convention)として、「この大会を成功させるために、われわれは可能な限りのすべてのことをなすべきである」と、たいへん張り切った調子の PSA 会員への協力の呼びかけが見られる。

さて、次に、第3の計画行動は、徴兵に関するカウンセリングを心理学関係学会において行ない、資料を心理学学生に配布することである。これは、法律的にも心理学的にも徴兵に関する情報を充分与えて、心理学生への徴兵に対する自主的な態度決定を促がすというものである。それと同時に、ベトナム戦のもつ社会的影響の検討も計画されている。

第4は、Los Angeles のメキシコ系米国人貧困地域に無料診療すること。これは実現された。

そして、第5に、一般公衆に、人種差別と暴力の心理学的側面についての教育を与えることである。

こう書いてくると、PSA は行動に走ってばかりいて、反知性主義的ではないかの疑問が生まれるかもしれない。

この点については、前述の APA 来期会長、Kenneth B. Clark のことばを引用しよう。「社会科学が、まじめに受けとられるためには、発展しうるためには、そして、社会と関連をもつためには、社会科学は社会におけ

る人間の現実的問題をあえて研究しなければならない。現実のコミュニティを、市場を、政治と権力の場を、その実験場として用いなければならない。そして、社会行動と社会変化のダイナミックに直面し、これを理解しようと努めなければならないとわたくしは信ずる。」つまり、PSA は社会的行動を通じて、市民としての行動を通じて、さらには専門家としての研究を通じて、心理学者が社会の福祉に貢献することを促がし、これを組織し、援助することを目ざしているのである。

自分達の研究を何とかして社会的に有意義な方向へもっていかうという動きは、必然的に、これまでの心理学者のあり方への反省にもつながっていく。たとえば、Social Action 1969年2月号には、次のような報告がみられる。自決と貧困に関する PSA 委員会が問題とした点として、「医師や弁護士がすることは貧困地域で非常な需要があるのに、心理学者がすることには需要がないのはなぜなのか？ 心理学者の多くは、直接に人々を助けることよりも記述的研究をすることにより関心をもっているようである、このことが原因かもしれない。また、地域社会に貢献するような活動がどこからも奨励を受けていないことも原因かもしれない。また、われわれの非能率さは、われわれがいわゆるオーソドックスな研究法にかじりついていて、それから外れる方法、たとえば、現在生きている人々の生活に何らかのちがいを生むような何かをすることのできる『参加観察法』を避けようとしていることに原因があるのかもしれない」としている。また、心理学者は、どんな社会問題もあまりにアカデミックな仕方でも問題とし、心理学者間だけの話し合いに終始して、研究の成果を生かして社会的効果をもたらす努力に欠けていたのではないかとこの反省もなされている。

その他、軍事心理学を研究することと、APA の倫理綱領との関係も問題とされ始めている。この問題に関しては PSA 会員の間で手紙のやりとりがあり、Social Action 1969年8月号に紹介されている。A氏は軍の資金により調査研究を行なっている。そのテーマは、スラム街の黒人青年達が、軍に徴兵されたことにより除隊後生活が向上したかどうか、という問題である。B氏は、A氏のこのような研究はスラムの黒人からより多く徴兵する口実を軍に与えるものだから協力すべきでないという批判をあげている。これに対し、A氏は、自分は自己の良心に従って客観的な研究結果を出す、これがどう使われるかは研究者としての自分の関与するところではない、また、もし自分がこれを放棄したとして、自分より劣った研究者が結果をゆがめて出すようなことにならば、かえって、われわれの意図に反するのではないかと反論している。いつもくり返される論議ではあるが、心理学に関連した問題として興味深い。

このほか、APA 内部および関連産業における人種差別を調査しこれを追求するという動きも活発化しつつある。

こうして、PSA の全国的レベルにおける運動は、一部においてはすでに成功を収め、ますます活発化しつつあるのである。

筆者のいた Cornell 大学でも San Francisco 大会

後、PSA の地域グループ結成のための会合が何回か開かれていた。Cognitive Psychology の U. Neisser や Measurement of Meaning の Suci らが呼びかけて会を開いたときには、心理学者はいかなる仕方で社会に貢献しうるかという問題が自由に論議された。心理学者と一言でいっても、実は領域によって事情はさまざまなのであるが、いくつか典型的な意見が出されていた。その一つは、心理学者といっても、正直に言って、一般市民と特別異った貢献ができるほどのものを何も持っていない、要するに、一市民として社会につくす以外にないのではないかという意見。また、いや、たとえば社会心理学や臨床心理学の知見は、人種偏見や暴力の心理を明らかにしているのではないか、これを一般人に知らせてその根を除いていくことなどができるといふ意見。さらには、心理学者が社会問題に対して確固たる解決策をもたないのは事実かもしれない、しかし、一般人が心理学者に何か専門家として研究にもとづいた対策をもっていることを期待しているのもまた事実だ、そこで、心理学者はたとえ研究にもとづいた充分な裏づけがなくても、この一般人の役割期待にこたえて社会をよりよい方向にもっていく一助となる活動をすればよいといった現実論(?)も提出された。この現実論は、たとえば Bruner が教育に関して発言するときにとっている立場に近いように思われた。

以上のような背景のもとに、異変をかかえた1969年 APA 大会は Chicago ではなくて、Washington, D. C. で開られようとしている。まさに“Unconventional Convention”である。アカデミックな世界にひきこもりがちだった心理学者たちが、このように活発に社会問題と心理学の関連を考え、意欲にもえて活動を開始したことは、大いに注目に値することであると考える。来期は、PSA の会員である Kenneth B. Clark を学会長に迎えて、APA が、そして PSA が、いかなる運動を展開するか注目したい。

(追記) この報告を書くに当って用いた資料は PSA の co-chairman の一人 Jack Sawyer と Cornell 大学における筆者の親友 Norman Becker の好意によって入手したものである。記して謝意を表したい。なお、PSA の事務局の宛名は以下の通りである。

Psychologists for Social Action

133 W. 72 St., N. Y. 10023 U. S. A.